

聖心女子大学キリスト教文化研究所

公開講演会

聖心女子大学キリスト教文化研究所では、大学による生涯学習の一端を担い、学生、卒業生ならびに一般の方々のために、公開講演会を開催してまいりました。

講演内容

年度	講演者	演題
2018年度	弓山 達也氏 (東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院教授)	「被災地復興と新しい生き方」
2017年度	横田 南嶺老師 (臨済宗円覚寺派管長)	「仰げば光あり」
2016年度	若松 英輔氏 (批評家・随筆家)	「悲しみの神学——近代日本キリスト教感情史」
2015年度	山根 道公氏 (ノートルダム清心女子大学 キリスト教文化研究所教授)	「遠藤周作と井上洋治 21世紀への遺言-マザーテレサ、 宮沢賢治との響きあい」
2014年度	曾野 綾子氏 (作家・本学卒業生)	「人々の中の私」
2013年度	映画上映会「天のしずく 辰巳芳子”いのちのスープ”」	
2012年度	鈴木 秀子氏 (聖心会会員・元本学教授)	「いのちの絆をたずねる」

目次

2018年度公開講演会	チラシ	……	3～4頁
2017年度公開講演会	チラシ	……	5～6頁
	報告書	……	7～10頁
2016年度公開講演会	チラシ	……	11～12頁
2015年度公開講演会	チラシ	……	13～14頁

聖心女子大学キリスト教文化研究所

2018 年度公開講演会

被災地復興と新しい生き方



講師：弓山 達也 氏

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授

2018 年 6 月 16 日(土)

入場
無料

11:00～12:30 (10:30 開場予定・全席自由席)

聖心女子大学宮代ホール

〈〈 災害復興チャリティデー 〉〉

同日開催 12:30～16:00 聖心女子大学マリアンホール
ステージ公演・バザー・復興支援報告など

〈会場アクセス〉

聖心女子大学 3 号館・宮代ホール

■東京メトロ日比谷線「広尾」下車 1 または 2 番出口より徒歩 5 分

■JR 渋谷駅南口または恵比寿駅より都バス 「日赤医療センター前」行き 「日赤医療センター前」下車 徒歩 5 分

〈お問い合わせ〉

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1 聖心女子大学キリスト教文化研究所

TEL 03-3407-6089 (月～金曜 10:00～17:00) Email: kiriken@u-sacred-heart.ac.jp

2018年度 公開講演会のご案内

聖心女子大学キリスト教文化研究所では、生涯学習の一端を担い、学生、卒業生ならびに一般の方々のために、毎年、公開講演会等を開催してまいりました。

本年度は、東京工業大学教授の弓山達也先生をお招きし、「被災地復興と新しい生き方」という題でご講演いただくことにいたしました。

弓山先生には、以前、大正大学在任中に、本研究所の共同研究にご参加いただき、「宗教系大学の社会貢献とスピリチュアリティの教育」と題して、仏教系大学における学生たちとともに行なっておられた地域コミュニティスペース作りや、東日本大震災後の被災地支援活動についてご講演をいただきました(本研究所物『宗教なしで教育はできるのか』2013年刊行に所収)。今回は、その後も続けておられる被災地との関わりの中で出会われた多くの人々の「新しい生き方」についてお話くださることです。

東日本大震災というあれほど大規模な災害について、単純に「復旧」「復興」を語りうるのは、主として置き換え可能な物質的な生活次元にとどまるのであり、失われた多くの命、身近な命や慣れ親しんだ生活を奪われた苦しみ、安定した生活を取り戻す労苦とそのために奪われた時間など、人間生活の「取り返すつかない」次元においては、ひとはそれぞれ「新たに生き直す」しかありません。それは単に被災地に生きる人々だけのことではなく、同じ社会において関わる私たち全体の問題でもあります。弓山先生のお話を通して、私たち自身の「新たな生き方」を考える視点を得られるものと期待しています。

なお、去年は同日開催を見送りましたが、本年は再び、本学の「震災復興支援チャリティデー」と同日の開催になります。バザーや東北物産の販売等のほか、学生団体や姉妹校等による震災や復興支援に関する研究展示も行われますので、併せておいでいただければありがたく存じます。

聖心女子大学キリスト教文化研究所所長
加藤和哉

■講師プロフィール

弓山 達也(ゆみやま たつや)

1963年、奈良県生まれ。法政大学哲学科、大正大学大学院宗教学専攻に学び、大正大学教授を経て、2015年より現職。専門は宗教社会学。主な著書は『祈る ふれあう 感じる』(共著)、『癒しと和解』(共編)、『癒しを生きた人々』(共編)、『スピリチュアリティの社会学』(共編)、『天啓のゆくえ』、『現代における宗教者の育成』(責任編集)、『いのち・教育・スピリチュアリティ』(共編)など。

■講演「被災地復興と新しい生き方」概要

東日本大震災発生から7年経った今、全国の避難者数は約7万5千人。国は2016年度から2020年度を「復興・創生期間」と位置付けたが、依然、防災・減災のまちづくりといったハード面から、ストレス、喪失感、孤立などのソフト面まで諸問題が山積している。講演者は震災直後からボランティア学生を引率し、今も復興イベントなどに関わっている。同時にこの間、被災地で「新しい生き方」ともいうべき、新しい価値観・ライフスタイル・合意形成が生まれつつあるのを見てきた。亡くなった友のために民俗芸能を復活させた高校生、復興のシンボルにすべく新しい祭りを作るオヤジさん世代。ボランティアとして関わり、やがて被災地に根を下ろした若者たち。こうした「新しい生き方」が日本の、否、世界の新しい時代を切り拓くものと確信しつつ、写真を交えつつ話をしていきたい。

聖心女子大学キリスト教文化研究所主催

文学部哲学科共催

「仰げば光あり」

講師：横田南嶺老師
(臨濟宗円覚寺派管長)



◆講演内容

仏教詩人と呼ばれた坂村真民の詩を紹介しながら、「私が詩を作るのは、人間らしい人間として生きたいからだ」と言われた真民の詩に込められた思いを学びます。そこから、仏教や禅についての考えにも触れつつ、お互いがこの世に人間として生きる道について考察してみます。

2017年7月17日(月)

入場
無料

15:20～16:10 (14:30 開場予定・自由席)

聖心女子大学・ブリット記念ホール



〈アクセス〉

聖心女子大学 ・ブリット記念ホール
(4号館/聖心グローバルプラザ)
東京メトロ日比谷線「広尾」下車
4番出口から徒歩1分

〈お問い合わせ〉

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1
聖心女子大学キリスト教文化研究所

TEL 03-3407-6089

聖心女子大学
キリスト教文化研究所主催
文学部哲学科共催
2017年度 公開講演会のご案内

近年の痛ましい出来事を見聞するにつけ、ともすると偏見や狭量が幅をきかす時代がやって来たのではないかと、多くの人びとが不安に思っています。わたしたちはみな、さまざまな環境に育ち、さまざまな思考法や感性をそなえ、さまざまな年齢層に属し、さまざまな願いや憧れや怖れをいだいて生きています。だからこそ、ゆたかな可能性へと拓かれた寛容な精神が求められているのではないのでしょうか。

聖心女子大学キリスト教文化研究所では、今後いよいよ重要になるであろう生涯学習の一端を担うべく、学生、卒業生ならびに一般の方々のために、毎年、公開講演会等を企画・開催してきました。

東日本大震災以降、本研究所では「フォーラム 311」と銘打って、「震災復興支援チャリティバザー」と同日に6回連続で公開講演会を開催してきました。本年度は、チャリティバザー会場のマリアンホール改修のため、本講演会は7年ぶりの単独開催となりますが、その精神は引き継がれています。講師にお招きした横田南嶺老師(鎌倉の臨済宗円覚寺派大本山円覚寺管長)は、何度も被災地にお見舞いにいらっしや、追悼と復興の祈りをささげてくれました。

2010年に円覚寺管長ご就任後も、僧堂主を兼任なされ、ご人徳を慕って全国から集まる若い修行僧の育成に携わってこられた老師が、仏教詩人と呼ばれる坂村真民の詩を読み解きながら、仏教や禅の真髓を教え説いてくださいます。

カトリック大学のキリスト教文化研究所主催・文学部哲学科共催の講演会で、現代日本の禅仏教の最前線で活躍しておられる老師がお話くださる——この究極のエキュメニカルな講演会にぜひお越しください。キリスト教文化研究所所員および哲学科教職員一同、皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

聖心女子大学キリスト教文化研究所所長
富原 真弓

横田 南嶺(よこた なんれい)老師

1964年 和歌山県新宮市に生まれる。

1987年 筑波大学卒業と同時に出家し、京都の建仁寺僧堂で修業を開始。

1991年 円覚寺僧堂で修行、足立大進前管長に師事。

1999年 円覚寺僧堂師家に就任。

2010年 鎌倉の臨済宗円覚寺派管長に就任。

■横田老師のご著書

著書に『青松閑話』、『延命十句観音経のはなし』、『いろはにほへと ある日の法話より』全3巻、『祈りの延命十句観音経』(春秋社2014)、『禅の名僧に学ぶ 生き方の知恵』(致知出版社2015)、『二度とない人生だから、今日一日は笑顔でいよう』(PHP 研究所 2016)、『人生を照らす禅の言葉』(致知出版社 2016)、DVDに『精一杯生きよう』(禅文化研究所)、CDに『「十牛図」に学ぶ』(致知出版社)、解説に鈴木大拙『禅堂生活』(横川 顕正訳、岩波文庫、2016)など。

■臨済宗大本山 円覚寺

鎌倉時代後半の弘安5年(1282)、執権北条時宗が中国・宋より招いた無学祖元禅師により、円覚寺は開山されました。建立の際に出土した大乘經典の「円覚経(えんがくきょう)」が寺名の由来といわれます。無学祖元禅師の法灯は高峰顕日(こうほうけんいち)禅師、夢窓疎石(むそうそせき)禅師と受け継がれ、その法脈は室町時代に日本の禅の中心的存在となり、五山文学や室町文化に大きな影響を与えました。

創建以来、北条氏をはじめ朝廷や幕府からの篤い帰依を受け、明治時代以降は、今北洪川(いまきたこうせん)老師・釈宗演(しゃくそうえん)老師の師弟のもとに雲水や居士が参集し、多くの人材を輩出しました。今日の静寂な伽藍は、創建以来の七堂伽藍の形式を伝え、現在もさまざまな坐禅会が行われています。

キリスト教文化研究所主催・文学部哲学科共催 公開講演会および学生懇談会の報告

キリスト教文化研究所所長 富原真弓



戦後の1948年、聖心女子大学はブリット初代学長のもと新制女子大学として発足しました。そして1957年、同学長時代に創設されたキリスト教文化研究所(当時はカトリック文化研究所)は、この2017年に60周年を迎えました。

記念すべき節目の年に奇しくもお披露目となった、初代学長の名をいただくこのブリット記念ホールにおいて、開山1282年という由緒ある臨濟宗円覚寺派大本山円覚寺管長の横田南嶺老師をお招き、「仰げば光あり」というお題でご講演いただきました。

一般のお客さま、卒業生、学生、教職員、本学関係者で埋め尽くされたホールがしんと静まり返って、老師のお話に聞き入ります。

「猿跳んで一枝青し峯の松」という俳句の引用のあと、「びよんと跳ねるおサルさん、緑の松の枝、この情景を頭のなかの画用紙に描いてみてください」と老師は仰って、しばし間をおかれます。わたくしを含め、おおかたの聴衆はなんだろうという表情です。すると老師はなぜ解きをしてくださいました。

「これは一面の雪景色をうたっているのです」。

つづく老師のご説明を、わたくしなりにまとめてみました。おサルさんがびよんと松の枝から跳ねたはずみで、枝から雪が落ちて、それまで雪に埋もれていた松葉の緑がひょっこり顔をのぞかせた。一読したところどうということもないこの俳句は教えてくれる。

自分が見ていると思っているものは、大きな広い世界のほんのちっぽけな一部にすぎぬのであって、そこにはなにもないことを知る、これがいちばん肝要なのだということ。

さらに老師は坂村真民の詩を朗読なさりながら、「幼い子どもにもわかる」平易な言葉のうちに隠された、大きな真理について語っていただきました。

日々の煩わしさや不安にとらわれて、足もとの影ばかりを見つめるのではなく、おサルさんが去ったあとの緑を見て、まわりから包みこんでくれている雪や光に気づくことができる自分になろうと心に誓い、雪のうえを軽やかに跳ぶおサルさんに思いをはせた、暑い真夏の午後の一ときでした。

講演会のあと、ご著書へのサイン会がおこなわれました。



このたびの老師のご来学にあたり、キリスト教文化研究所と哲学科は、公開講演会のあとに老師と学生との懇談の場を設け、希望者を募りました。学部と大学院の学生および直近の卒業生が出席し、所属学科は哲学、英文、日文、教育、心理と多分野におよびました。キリスト教文化研究所および哲学科の教職員スタッフが後方の席で見守るなか、終始なごやかながらも心地よい緊張でみたされた時間が流れ、出席者はそれぞれの関心や感性に導かれて、それぞれが自分なりの言葉で質問をし、老師はひとりひとりに丁寧に真摯にお答えくださいました。



この貴重な体験を言葉にしてみてもどうかと呼びかけたところ、すぐさま感想が寄せられました。その一部を以下に紹介いたします。

MT(英文)

講演会でも、懇談会でも、たいへん印象的でしたのは、老師さまが、若者をひとまとめにすることなく、私たちひとりひとりを見て、その声に耳を傾けてくださったことです。生きていることを見守られている、と感じました。

寛容であることが弱いこととみなされ、ほかを排除してでも自分を主張することが強いことであるかのように錯覚させられる今、この世でもっともちいさいもの、声のないもの、目にみえないものを導び、慈しむという老師さまのお話を拝聴できたことは、おおきな喜びです。講演会にてご紹介いただいたどの詩、どの言葉にも、いのちを見つめる、人文学の豊かな力を感じました。老師さまが朗読くださった、坂村真民の「風」が、朝焼けの風のように心をつつむのを感じながら、幼いころ風が友だちであったことを思い出しました。ゆつくりと色を変えてゆく空に見守られながら、すっかり安心しきって、道端のタンポポやダンゴムシに大喜びしていたあの時こそ、心のすべてを光にゆだね、内と外、自分と周りとのあいだに境界をつくることなく生きていたのかもしれない。

懇談会で伺った臨済宗の修行のお話は、たいへん興味深いものでした。老師さまは、修行は自己否定の連続だと説明なさいます。自己否定というと消極的なものに思われますが、お話を伺い、実際は自分を外の世界と繋げようとする、非常に積極的な作業であることを知りました。自己を否定しきったとき、「私」は消えてなくなるのではなく、むしろすべての境界から解放されて、自分が世界によって成り立ち、自分もまた世界の一部であることに気づかされます。国境のない鳥になりたい、とは坂村真民の残した言葉だそうですが、境界をなくすという作業がいかに難しく、また重要であるかを、老師さまの力強いお言葉で再確認した一日でした。

RN(哲学)

横田南嶺老師さまのご講演と懇談会は、日頃私たちが慣れ親しんでいる、ものの捉え方について見つめ直す機会をくださいました。お話の中でしばしば、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教などの教義や思想のうちには共通するメタファーがあること——例えば、国境にとらわれず、自由に空を飛ぶ「鳥」の表象など——を示しておられました。このようなメタファーがあるということは、人々は“ある一つのもの”を親得し、信仰を通じてそこへ到ろうと目指している、とすることもできるでしょう。そうした境地では、本来、民族や宗教の違いはありません。その“一つのもの”について、個々の信条のうえで様々に言い換えているにすぎないのです。老師さまは、仏教詩人・坂村真民の詩を引用しながら、またご自身のご経験をあげながら、宗教を超えた人類共通の深いものや境地があることを教えてくださいました。

宗教を超えるということは、禅でいう「自他の違いを超えること」でもあります。このことは、常識に執っている私たちには難解な、禅の公案にも多く説かれています。禅の公案は、小さな自己を反省することで、他とつながり得る世界が拓けてくる、その可能性を提示しているのだと思います。私たちが日々、小さな自己に拘泥していることをまずは認識すること、これによって「仰げば光あり」——もの見方は変わる、そのようなことを、ご講演と懇談会において老師さまは教示してくださいました。

AS(教育)

私は昭和期の教養主義について研究しており、かつて多くの教養人が坐禅をすることで人格を修養していたことが分かって以来、坐禅に関心を持っております。私自身も週に一度近くの禅寺にて坐禅会に参加しており、このたび老師さまのお話を拝聴することができ光栄に存しております。

私の研究している教養主義では、人生の目的を「人格の完成」に設定していますが、老師さまにとって人生の目的とは何でしょうかと質問させていただきました。

老師さまは教えてくださいました。人生の目的は「人格の完成」だということ間違いなく、それを仏教では「仏になる」と表現するのであると。また、身体、言葉、心の三本柱があるのだが、人を傷つける行いをしない、人を傷つける言葉を投げつけない、人を傷つける考えを持たない、この三つの「ない」を徹底することで自我が高められていくとお答えになりました。

老師さまのお答えはもちろんですが、表情やお言葉も終始穏やかで、それも印象的でした。そして人格者とは、このような穏やかさがおありなのだろうなと思いました。老師さまのお話くださった三本柱における「ない」を徹底することは大変難しく、仏門に入る入らないにかかわらず、一生を通じての修行なのではないでしょうか。このように他者を傷つけてしまう自己を否定して、それを積み重ねていくうちに、自我も高められて徐々に穏やかさや温かみが出てくるのではないかと思います。

MA(哲学)

禅では修行として自己内省が行われ、それは徹底した孤独の中での鍛錬であると思われれます。一方で、この講演会では老師さまから、人は「いつも一緒」、孤独はあり得ず、いつも何かと共にあるのだというメッセージをいただきました。一見して相反するようなこの二つの事柄は、禅の思想においてどのように結びつくのでしょうか。この質問に老師さまはつぎのようにお答えになりました。

禅では修行として、何年もかけて自己否定(内省)をくり返す。タマネギの皮を剥くようなものだ。人はタマネギの皮を剥き続ける(自己否定し続ける)と、最後にはその中心となるもの(確固とした自己)を見いだせると思っている。しかし、実際には剥いても皮ばかりで、最終的にそこには「無」があると気づく。「無」とはすなわち何も無いことが全てだ、という境地であり、固定概念などに囚われ生きている自分を自由にするのである。「無」にたどり着くと、自己の内と外の境界の区別が消える。それまでの徹底した自己否定が、ここで肯定へと変化する。このような過程を経て、自分自身を愛するのと同じように、他者を愛することができるようになる。

学生・卒業生との懇談を終えられた老師は、通称「パレス」と呼ばれる旧久邇宮(クニミヤ)邸の御常御殿の見学に向かわれました。いつまでも明るく夏の夕方、御殿をゆっくりとご覧になってから、ご同行の雲水さんを伴われて帰途につかれました。その遠ざかっていく後ろ姿をお見送りながら、公開講演会にお越しくくださった皆さま、学生や卒業生、教職員および本学関係者のひとりひとりにとって、この一日が忘れがたい日となったことを確信しました。



聖心女子大学キリスト教文化研究所主催
公開講演会 〈フォーラム311〉 第6回企画

悲しみの神学

—近代日本キリスト教感情史



講師：若松 英輔氏

批評家・随筆家(2016年『叡知の哲学 小林秀雄と井筒俊彦』で
西脇順三郎学術賞受賞)

近代の日本人は、いかにしてイエスを、神を求めたか。内村鑑三とその弟子、岩下壯一神父、作家の遠藤周作、須賀敦子などキリスト教徒はもちろん、与謝野晶子や太宰治、中原中也など洗礼を受けなかった人々の眼に映ったイエスの姿を見つめながら、悲しみの感情史をひもといてみたいと思います。

2016年6月18日(土)

11:00～12:30 (10:30開場予定・全席自由席)

入場
無料

聖心女子大学宮代ホール

〈〈 震災復興チャリティーデー 東北を忘れない。これからも、ずっと。 〉〉

同日開催 12:30～16:00 聖心女子大学マリアンホール

震災に関する展示・東北物産展・ワークショップ・クラブやサークルによる公演など

お問い合わせ：聖心女子大学キリスト教文化研究所

(03-3407-6089 kiriken@u-sacred-heart.ac.jp)

2016年度 キリスト教文化研究所 公開講演会のご案内

聖心女子大学キリスト教文化研究所では、大学による生涯学習の一端を担い、学生、卒業生ならびに一般の方々のために、公開講演会等を開催してまいりました。

本年度は、批評家の若松英輔氏をお迎えし、「悲しみの神学—近代日本キリスト教感情史」という題でご講演いただくことといたしました。

若松英輔氏は、遠藤周作にも影響を与えたカトリック哲学者吉満義彦を扱う『吉満義彦 詩と天使の形而上学』(2014)など数々の評伝で知られ、近年では日本近代のスピリチュアリティ全体を視野に収めた著作活動をしておられます。昨年末には『イエス伝』を上梓され、いま日本で最も注目されるカトリック作家でいらっしゃいます。今年の山根道公氏のご講演に続いて、日本のカトリック精神史をより広い日本の近代精神史全体の中でとらえるお話をうかがえるものと考えております。

東日本大震災と原発事故から丸五年たち、地域社会の再生や経済の復興が目に見えるように進展しているなか、癒やされぬ心の傷や苦しみは見過ごされてまいがちです。もとより、苦難や悲しみは人間が望んで手にするものではありませんが、人間として生きる限り避けがたいものです。イエス・キリストは人々の苦しみを共にし、また自らも苦難を身に受けることで、苦難や悲しみの意味を明らかにしました。この「フォーラム311」のシリーズでも、震災の翌年には、被災者たちの心に寄り添う活動をしておられた鈴木秀子氏(聖心会)のお話をお伺いしました。本年のご講演のテーマは、こうした人間存在が抱える「傷付きやすさ」の次元にも触れるものであると思います。

なお、本年もまた、本学が東日本大震災からの復興を支援するために行っております「震災復興支援チャリティデー」が同日開催されます。バザーや東北物産の販売のほか、学生団体や姉妹校等による震災や復興支援に関する研究展示等も行われますので、併せておいでいただければありがたく存じます。

聖心女子大学キリスト教文化研究所 所長
加藤和哉

■ 講師プロフィール

若松英輔(わかまつ・えいすけ)

批評家・随筆家。1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。2007年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第14回三田文学新人賞受賞。

2016年『叡知の哲学 小林秀雄と井筒俊彦』で西脇順三郎学術賞受賞。

著書に、『井筒俊彦 叡知の哲学』(慶應義塾大学出版会)、『魂にふれる 大震災と、生きている死者』(トランスビュー)、『涙のしずくに洗われて咲きいづもの』(河出書房新社)、『生きる哲学』(中公新書)、『悲しみの秘義』(ナナログ社)、『イエス伝』(中央公論新社)などがある。

「悲しみの神学—近代日本キリスト教感情史」

宗教の世界を生きるとは、人間が、人間を超えた何ものかを全身で求めることのように思われます。さらにいえば、超越とのまじわりをもとめずにはいられない、もっとも高い意味での衝動なのかもしれません。

その営みは、理性だけの働きではありません。そこには豊饒な感情が流れ込んでいます。人は、喜びのうちに神を求めることもできますが、悲しみのとき、いっそう近くに大いなるものの働きを感じます。

近代の日本人は、いかにしてイエスを、神を求めたか。内村鑑三とその弟子、岩下壯一神父、作家の遠藤周作、須賀敦子などキリスト教徒はもちろん、与謝野晶子や太宰治、中原中也など洗礼を受けなかった人々の眼に映ったイエスの姿を見つめながら、悲しみの感情史をひもといてみたいと思います。

遠藤周作と井上洋治 21世紀への遺言

—マザー・テレサ、
宮沢賢治との響きあい



現代の私たちが生きるヒントと
宗教の平和と共存について
遠藤周作と井上洋治神父の
遺言的著作から
ともに考えたいと思います。

聖心女子大学キリスト教文化研究所主催 公開講演会
フォーラム 311 第5回企画

講師：山根道公氏
ノートルダム清心女子大学
キリスト教文化研究所教授

2015年 6月 13日 (土)
11:00 ~ 12:30
(10:30開場予定)

入場
無料

聖心女子大学 宮代ホール

震災復興支援チャリティデー
同日開催
12:30~16:00 @マリアンホール

聖心女子大学キリスト教文化研究所
03-3407-6089
kiriken@u-sacred-heart.ac.jp
☎【聖心キリスト教】で検索

2015年度 キリスト教文化研究所 公開講演会のご案内

聖心女子大学キリスト教文化研究所では、大学による生涯学習の一端を担い、学生、卒業生ならびに一般の方々のために、公開講演会等を開催してまいりました。

本年度は、ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所教授の山根道公先生をお招きし、「遠藤周作と井上洋治 21世紀への遺言—マザー・テレサ、宮沢賢治との響きあい」という題でご講演いただくことにいたしました。

山根先生は、遠藤周作を中心とした日本の近代キリスト教文学研究の第一人者のお一人であるというだけでなく、生前の遠藤周作氏、ならびにその盟友井上洋治神父と深い親交を結んでおられた方です。特に井上神父とは「風(プネウマ)の家」運動の創設以来、活動を共にされ、その機関誌の編集・発行を担われました。『遠藤周作文学全集』『井上洋治著作選集』の解説・解題も担当されており、このお二人についてお話をうかがうのにこれ以上にふさわしい方はいらっしゃらないといっても過言ではありません。

東日本大震災と原発事故、ならびに今なお続くそれらの影響に直面して、私たちの思いを分かちあう場として開催してまいりました「フォーラム 311」も、今年で5回目となります。このたびのご講演では、20世紀の日本を代表するカトリック作家遠藤周作と、彼と共に現代日本におけるキリスト教の生命について追求した司祭井上洋治の著作をひもといて、現代人が送る経済的・物質的次元の「生活」とは異なる「人生」の次元を豊かにする知恵と宗教の平和と共存についてお話し頂けるということです。ぜひ大勢の皆様のお越しをお待ち申し上げます。

なお、同日には、本学が東日本大震災からの復興を支援するために毎年行っております「震災復興支援チャリティデー」が開催されます。バザーや東北物産の販売等のほか、学生団体や姉妹校等による、震災や復興支援に関する研究展示も行われますので、併せておいでいただければありがたく存じます。

聖心女子大学キリスト教文化研究所
所長 加藤和哉

■ 講師プロフィール

山根道公 (やまね・みちひろ)

ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所教授。文学博士。

1960年岡山県倉敷市生まれ。井上洋治神父が日本人の心にイエスの福音を届けたいとの願いからはじめた「風(プネウマ)の家」運動を1986年の創設から共にし、現在もその運動を引き継ぎ、機関誌「風」の発行、遠藤文学講座、聖書講座等を行っている。また、2006年には遠藤文学の研究者たちと遠藤周作学会を立ち上げ、以来、事務局長を務める。2014年には遠藤周作学会と韓国の日本基督教文学会共催で、日・韓・英の研究者が集い国際シンポジウム「『沈黙』をどう読むか—普遍と特殊」を開催した。

また2011年の東日本大震災の折には、夏に学生たちと岩手の大槌町でヴォランティア活動に参加し、その経験も踏まえ、大震災以降の文学の使命をテーマにしたシンポジウムで「遠藤周作と宮沢賢治—死をめぐる宗教性」を発表した。

『遠藤周作 その人生と「沈黙」の真実』(2005年、朝文社)により2006年日本キリスト教文学会奨励賞を受賞。また2010年、マザー・テレサ生誕100年の年に『遠藤周作「深い河」を読む マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界』(朝文社)を刊行。2006年9月、遠藤周作没後10年の記念として作家遠藤周作を育てた母・郁と周作との母子体験に焦点を当てた『落第坊主を愛した母』(海竜社)を監修。

* * *

遠藤周作が遺言的著作『深い河』を通して現代人に伝えたかったのは、生活と人生の違いです。10回の入院体験、両親の離婚、愛する者の死など生活の次元では挫折を繰り返した遠藤周作は、そうした挫折に生きる意味を見出す人生の次元を、小説やエッセイで描き、苦しみを超えて生きるヒントを教えてください。井上洋治神父の遺言的著作である遺稿集でも、生活の次元を豊かにする「科学の知」に対して、人生の次元を教えてください「宗教の知」が孤独な現代人にどんなに必要かが語られます。また、両著作は宗教の平和と共存のためのあるべき姿を示唆し、それはマザー・テレサや宮沢賢治の世界とも響きあいます。そんな人生の次元を、現代の私たちが生きるヒントを、遠藤周作と井上洋治神父の遺言的著作からともに考えたいと思います。